

漱石学

漱石ほど研究の俎上に乗せられることの多い作家である。作家論、作品論、評伝やエッセイ、比較文学論、さらに漱石文学を下敷きにして書かれる小説に至るまで、研究は多種多様である。文字通り「漱石学」なるものが存在する。

小宮豊隆：漱石文学は、「自己本位」から「則天去私」に到達するもの

江藤 淳：作家論が道德観の成熟論から微妙な解釈の変容を蓄積させながら、「道德の偶像」としての漱石像の破壊へ、漱石論の画期的な地平」へ。偶像としての漱石に交わるのでなく、漱石のテキストに深く入り込み、それがいかようにでも読み得るものであるとした。

偶像化は漱石の不安や葛藤を抽象化し、それを一般的な道德の問題としてしまい、みんな漱石のように悩み、漱石のように問題解決を図るだろうことを前提に、それを平凡な人物の共通な問題とし、それを他人事のように三人称客観描写で語るトリックを用いることによって「則天去私」の神話が生まれた。と

このような批評はいずれも、漱石を読み直す際に強烈な個人的動機を持っており、新たに漱石論を書こうとする者は、おのずから、自分の立っている場所、論理の地盤を疑ってかかることになる。

先の「漱石論」の作者たちは一般的な「漱石像」ではなく、自分の「漱石像」を書く、書き直すこととなる。

桶谷秀昭 「夏目漱石論」

蓮実重彦 「夏目漱石論」

大岡昇平 「小説家夏目漱石」

柄谷行人 「漱石論集成」

石原千秋 「夢十夜における他者と他界」

小森陽一 「こころを生成する心臓」

これらは、漱石のテキストに深く入り込み、それがいかようにも読み得るものであることを証明した。

桶谷秀昭：存在恐怖症者漱石と日本近代の文明の変質過程の交叉する場所に、漱石を描く。

江藤 淳：「漱石とその時代」、明治という時代を資料分析によって浮き彫りにする評伝で、漱石は、評伝の主人公というより、時代を再現する装置となっている。漱石の無意識に反映した時代の無意識を漱石以上に発掘しようと企んでいた

大岡昇平：江藤 淳による「漱石の嫂登世との恋愛説」に対する反論も含んだ独自の作家論、作品論で、評伝的な要素も取り混ぜながら、漱石の創作法を資料分析、直観分析によってあぶりだした。

大岡氏の「漱石論」では「美文」という明治時代独自のエクリチュールについて語り、これは小説と異なる「文」というジャンルに属するエクリチュールであると指摘。

ジャンル論は、その後柄谷行人によって追及された。

水村美苗：漱石の頭を借りて「明暗」の結末を推理する論考で、「続明暗」を構想した。

柄谷行人：漱石の多様なエクリチュールを分析した論考は、それ自体が近代小説の解剖学であり、日本語による創作の可能性を拡大するヒントを引き出した。

漱石学の爛熟期：多種多様なテーマに基づく作品論が多量に生産された。

漱石を読み直す作業から見出される創作上の技法や日本語のエクリチュールの特質、さらに時代とかかわる作家の無意識は、他の作家を読み直す装置にもなった。つまり、漱石というフィルターを通して他の作家を批評するのである。

蓮実重彦：「漱石額」の爛熟期にあつて漱石のテキストに向かい合い、氏の漱石論は、一見「横たわる姿勢」や「水」などのイメージの変奏を中心に漱石を読む一種のテーマ批評だが、漱石のテキストは、テーマに基づく解釈を微妙にすり抜け、特定のテーマのもとにテキストを論じれば、逆にそのテーマから逸脱してしまう要素、埒外の要素に誘惑されてしまう。

漱石のテキスト、あるいは作中人物と作者漱石の間には、批評する者、もしくはテキストを書き換えようとするものが介在し、漱石のテキストは、どのように読みも許すが、決定的な読み方はない。

また、漱石を読み直すものは常に自分の解釈の限界を思い知る。と

漱石のテキストに特定のテーマを見出すことを辞めるか、もしくは特定のテーマを作者漱石以上に、漱石を書き換えてしまうかの二者選択の道を探ることになる。

小森陽一：「こころ」にまつわる論文は、「こころ」の後日譚の構想として読める。

漱石の自己意識

漱石の生きた時代の年表を調べてみると、彼がいかに動乱の渦中にあつたかがわかる。

日清戦争が勃発したころ、漱石 28 歳。 英国留学を終え帰国するや日露戦争が起きる。

1910年「門」を執筆のころ日韓併合。そして「こころ」の新聞掲載中に日本は第一次世界大戦に参戦。

めまぐるしく変わる世相のもとで次々に作品を発表した。

漱石は一貫して文明批評的な視点から物事を考えていたが、当時の世相が漱石の思考に何らかの影を落としていたのは、間違いないことである。

漱石が神経衰弱に陥っている時期に日本は戦争に向かい、漱石はそんな世相に居心地の悪さを常に抱いていた。

「私の個人主義」「三四郎」「それから」「彼岸過迄」

生活から遊離した理想や信条を語りながら、現実に裏切られる悲喜劇が漱石の登場人物についてまわる。彼らの精神状態は、いかにも不安定で、「行人」の一郎のように狂気の領域にまで踏み込んでしまう場合もあった。

もし、漱石が、アイロニーに満ちた自己認識を繰り返す登場人物の代弁者のごとく、小説を書いていたとすれば、頭ばかりか胃も痛くなるような風通しの悪い作品を読まされたであろうが、漱石は、狂気の領域に踏み込んだ登場人物の内面を描いても、どこか精神分析的な要素を内包させ、「杭夫」や「それから」、「行人」などの作品では、奇妙な内面の風景が描写されている。あくまで自然描写や人物描写などと同じ平面上にあり、写生文の描写スタイルなのである。

主人公が狂気に至っても、なお語り手は余裕のある視点を保持している。漱石の作品の特徴なのである。